

冴える

神宮詩織

孤独の夜は生活の輪郭を鮮明にするから

心に映るすべてが心配だ

ミルクに潜む膜は触れるまで形を成さない

傷心と感受は私の指の皮膚を通じて

全身をめぐる

わずか2ミリが外と私の隔たり

薄皮に赤い光が透けて

不安の感触を知る、安心していく

バットメモリー

木山緋菜

塩辛い羊水に浸った右足。

流れ着いたものたちの欠片が少し痛い砂浜で、

真っ赤に染まったテトラポットは、こんな形をしていただろうか？

落ちた日を飲み干した大きな胃袋は流星を映して、今度はてらてらしたそれを食べるのだ。

一等星のテトラトンは、まだ落ちてこないはず。

鏡に似た水面は、本当に水銀だったら死んでしまうけれど。

水しぶきみたいに散って舞ったら悲しいだけでしようと、囁いた人が居たのを思い出す。

中指にはめたアメジスト色の指輪と、花冠を結ぶ人差し指。

二人分のショートケーキと、重ねても鳴らないコーヒークップ。
嘘つきの小指。

テトラトンは、クリスマスツリーのでっぺんの星によく似ていて、東の空に乗っかっている。

輪廻転生

高津凜太郎

死んだからなんだ だからなんだ
心の臓が張り裂けたなら 縫い合わせた
フランケンシュタイン ブランケットがほしい
フラットな死神 人生は暇つぶし
価値はなし 勝ち話 ガチかなんて知らないし
最新 再診した再審 天秤には罪積み
地獄行き 時刻は停止
秒針、壊死 餓死だけ話
六道巡り 堂々と巡り
リインカーネーション 死因はなんでしょう？
恵みなし 救いもない 掬いあげ
再び地獄行き
悲鳴に始まり、始まり
長い旅時、それもまた価値無し

五里夢中

後藤彰宏

学校のグローバルアリーナは満員御礼。校舎に鳴り響く立体音響型チャイムは生徒を沸かす。お湯から水にするのは簡単だが、水からお湯にするのはひと手間かかる。とぼやいていた校長も公邸のメリーゴーランドでは大はしやぎ。

その傍ら教当先生、は今日も靴箱で探検隊ごつことストレス発散、の狭間の遊び。先生それは靴箱です。食べてはダメです。もちろん知っています。靴箱を抜けた先の職めん室で学年主任は静かに、バーチャル会議。もちろん一人で。

こんにちは。用務員のおばちゃんはまるでポケモンマスター。朝から夜まで波乗り、であちらこちらへ移動中。疲れたのか今はカブトムシと食似中。職めん室から運道場を眺めると問題児Aは今日もロケットスペース、ボードを試乗宙。注意したくないなあ。「先生今日は終わりにしましょうよ。」

目の前が黄金に埋め尽くされて、伸ばした手すら見ることも叶わず、溺れた！ かと思いきや、

ふよよう、と、金色の海から、浮かび上がって参ります。

顔を出せば、いきなり見えてくる、大きなエメラルドグリーンの月。

飴細工の船に拾われて、

ゆうら、ゆうら、たゆたい、たゆたい、

アリの死骸とヘマタイトの石で構成された

真っ黒な砂浜に降り立ちました。

私はそれら全て踏みつけにして、

ずんずん歩いて行きますと、

私の通った道が、真っ赤な血の跡になって、

思わず、走り出しました。

細い腕と白い袖が、視界の端にちらちら見えて、
だんだんと、足の裏が冷たく感じてきました。

森の中は、たくさんの目が覗いていました。

枝にとまった、一つ目鳩の目です。

ぼんやり光って、でも、すべて鋭くこちらを見えています。

蜘蛛の巣が木末から木末に繋がっている、

等間隔に置かれた、灰色に古ぼけた木が

前から現れては消え、現れては後ろに消えて行きます。

灰色の土の下は、凍った地下水がときどき露出して、ダイヤモンドの集団墓地です。

私は滑らぬよう慎重に、

ゆらゆら歩いて行きますと、

私の通った道が溶けだして、森の木が緩んだ地面に崩れて吸い込まれて、
思わず、また走り出しました。

手首に、なにか擦れた跡があつて

ああ、帰りたい。と強く思いました。

裸足のまま歩くのが痛くつて、見ると、やっぱり足首にも同じ跡がありました。

冷たいこんくりいとに、濡れた足跡。白光りしたのっぴな電柱、まんまるな
電灯。

辿り着いたのは大きな建造物の白い壁。

そこに空いている、ガラス張りの穴ぼこを見つけて、なかに入ると、
白い白いベッドがありました。

私の檻がありました。

消灯の時間はすっかり過ぎていて、

病室はしんと寝静まり返っております。

はっとして窓を見ましたが、

窓の外には、海が見当たりませんでした。

どうしても、見当たりませんでした。

覚えていたのは夢の帰り道だけでした。

ほんとうの帰り道は、覚えていないのに。

ほろり、と透明な涙が流れました。

海、もしくは夜っぽい日々

小出美桜

青じゃありません海、ミンミンゼミいません。

心臓はひとつがいいけど、指はゲソくらいほしいの。
そうやって宝箱の底を手探り。

あああけれど浮かべません、わたしカナヅチ。
海底。

溺れても泣きません。

反射光は誰も刺さない。蕾のように包むから。

なんて、こんなの理科の教科書には載っていませんでしたが
霧みたいな魚っていないと思ってて

わたし、波っぽい人間になりたいです。

激辛ラーメンは食べられなくても塩辛さには自信があるから。
何景目かの富嶽みたい

うみ丸飲み。

擬態型わかめが地味に暴れるだろう予想に

旧十円玉を賭けましょう、淡めの夜。

快晴。

明日は乾燥機を、日がな一日かける日。

おかしゝ

齋藤龍喜

十四日目、雨天。寝台ニテ交戦中。敵軍床デ泳ギ回ルプリングルズ数百匹。通信手段ハ一昨日ノ晩狂ツタ黒田ニ電話線切ラレテ無シ。紐救無シ。隊員残り僕ト二名。他ハ床ヘ身投ゲヲシテイッタ。三秒ルール無シ。食割レテイル。夜中隣デ隊員坂本龍馬ガ“毛虫を踏んでしまったじゃきい”ト連呼スル。正気カコイツハ。カルガ、我々ハ依然枢軸国ニ依ル絨毯爆撃ヲ望ンデイル。

跨道橋。干上がった音の中を泳いで奴らはやってきて、今じゃ凍ったどぶ川にまで狭苦しく侍らせている。

はなこや久しぶり。もう水は食べていないのか。

きレ

嫌であります

きレ

嫌であります

斬レ

ここは変わってしまったなあ。水遊びが好きだった子供たちはめっきりと消え。ただ竹の葉と川面がまぶたをとじて。

捨てられた錦鯉もどこかへ。

鳥が飛んだった。

雪が降っている。

黒田さんのやさしい背中だ。帰れたらべ張鶴と勾玉で献杯じゃ。

暖かいなあ。

“血みどろだ”

坂本さんが抱きしめてくれる。誇りであるきに。

ほがらかな野原であるなあ。

“ 焼け蒸したどてつばらだよ “

シャイセツツ!!!

十五日目、雨天。坂本ガ隠シテイタスマホが見ツカッタ。line ニュースニ因ルト本土ハ降伏シテイタラシイ。是ニテ充電ツキタ。早朝眼帯ノプリングルズガ降伏ヲ求メテキタ。ガ我々ハ諦メナイ。坂本、黒田、三秒ルール無し。当初ノ作戦通り本日午前十時ニテ戦闘用まくら風間ニ獅子唐ヲ装填シ突撃スル。再ビ、カールヲ東ニモ。

カ路

橋本龍一

渋谷ストリームが見えてくるあたり、あそこらへんでひずみとカラダが一体化するのだけど、分かる？ 彼女もしくは彼もしくはワッパーはおよそ2ミリメートルのうなずきをする。そんなことはどうでもいいので、C1出口がちかくなってくる角のいつもの行列にGoogleマップを馳せている。月末で1ギガもないからあの神社までしかたどり着けないかもしれない、と思っていたけど速度超過で通り越し抜き出でて、道玄坂に衝突してしまった。「木だけのものじゃないから避雷針は」とは本当のことのようで、一緒にいたやつと封鎖済みハチ公を完全に撒いた。バグで人が76倍(訂正..81倍)いる気がするので偽裏路地へ駆け込み、偽ほほえみを浮かべた偽ヨーロッパ人から偽オムライスでホイミ。40。違う、これ、ただの、毒イルカだ。

襟足からはみ出したためプロデュース失敗、課金してねいっばい。

遊泳時間

土屋はな

まっしろな泉に

「ー」の雫を落としたら

いっかい沈んでゆっくり浮いた

無彩色の中で

・とーははぐれないように

透明な手を繋いで泳いだ

「SPACE」に押され

知らない世界に「ENTER」したら

そこは

初恋に気付いた少女の

「恋」の検索結果だった

90's Nostalgia

立松千宙

オールナイト上映の帰り道

カフェインと砂糖でべたべたの繁華街

暗雲の隙間幽かに見えた

日の出前の不穏な瑠璃色

朝焼けに照らされた機能不全のビル

屋上から突き出たタワークレーンが

厳めしい顔で睨んでいる気がして

僕は足早に駅へと急ぐ

今が一番寒い時間

広告塔をやめた液晶

早引けした街灯

光が幽かな街の景色が

瞬きの隙間の再上映と重なった

35ミリのフィルムが紡ぐ

暗い画面と荒い色彩

今と似て非なる生活様式

どこか空虚な街の息遣い

ノイズがかった言葉が紡ぐは

自己と他者との遠い空白

根拠の乏しい投げやりなナーバス

悲観と無関心の果てに続く拘束

故に自己陶酔的センチメンタル

故に現実逃避的破滅願望

紗幕を隔てた過去の情景を

いつだって僕は追い求めている

画面の向こうにしか存在しない時代

人の伝聞でしか知り得ることの出来ない時代

他人事のはずの時代の狂騒に

どうして胸が締め付けられるのだろう

人の疎らなホームの隅で

肩を竦めて朝日を待ちながら

幻肢痛のようなノスタルジックの

正体を僕は追い求めている

腐敗

山本莉子

腐った肉は密閉して棄てる

熟して腐りかけのバナナは美味いというが

放っておいて良くなるのは

生傷だけ

ごくごく小さな生き物たちはそこで繁栄するが

「発酵」なんてもてはやされて

シュールストレミングなんてでかい顔して

「世界一臭い食べ物」に鎮座しているが

好き勝手やらせると

手のひら返して盾突いてくる

味のしなくなったガムを捨てて

それ以降思い出すことなんてないように

痛みも忘れられたらいいのに

黒

榎本壮流

そのことを考えると大きくなる
それをなくそうとすると膨らんだ
どうにか消そうとすればするほど
なくなってくれと願えば願うほど

ある時突然に出来上がったそれは
ふとした時にわたしの中に現れて
朝とか楽しさとかにはかくれてて
わたしの中にいないときもあった

くらいときこそ、それが目立った
そいつがわたしを黒くしていった
いきものでもなく、ものでもない
いないはずのものなのに強かった

ずっとわたしの中で暮らしていた
でも気が付いたらいなくなってた
ずっといたからなやんでいたのに
なんでもない時にいなくなってた

フローズン・ロマンス

鈴木優花

喫煙所を探して歩いていた。

二十四歳の、ある晴れた日の午後。

繁華街の雑踏を抜けて見えたのは、流行りのカフェ。高校生くらいの女の子が二人、ホイップクリームとフルーツが山盛りのパンケーキにカメラを向けていた。ぴったり並んで座っている、あどけない笑顔。

あの頃、同じ空間にいただけで満足する片思いをしていた私は、清楚気取りを目の敵にしていた。当たり前のように、恋に落ちた相手と並んで歩く背中が妬ましくて。笑顔とは無縁だった。

個性派を狙って前髪を斜めにカットした。「かわいい」の土俵に立っていないから、私をその物差しで評価しないで、と。

口には出せなかった。

誰にも教えていなかった。

好きなあの子と二人きり、授業を抜け出した。

人通りの少ない緩やかな坂道、二人乗りの自転車で風になった。駅前のコンビニのイトインで、文化祭の動画を横並びで眺めた。スマホに繋いだ有線イヤホンの左右を二人で分けて、頭を寄せ合った。近くに感じる体温と息遣いが私だけのものになったような気がした。

友達だから変じゃないよねって自分に言い聞かせて、あの子の手を引いた時、熱を持った頬。十分すぎるくらいドキドキした。

眩しいくらいの青い芽が、無意識のままに大きく育っていた。すべて一つずつ丁寧に、汚れないように、私だけのアルバムに仕舞った。

そして心に閉じ込めた。

誰に語ることもないまま、温度を失ってしまった。

いつかの日に溶かしてまた、味わってみたい。あの瑞々しさと、甘酸っぱさを。私はもう、お洒落なパンケーキなんて一枚食べるのだって精一杯だけど。

選択

吉高神太陽

机の引き出しを開けるたび、
手紙や写真、破れたチケットが語り掛ける。
捨てるべきものと、捨てられないものの狭間で、
心はゆれる。

このしわだらけの紙切れは何だろう??

「また行こう」と約束した日から、

一度も触れなかった地図。

行かなかった道。

それでも、あの日の笑顔が宿るから、
指先の迷いを見せる。

捨てる、とは何だろう？

それを忘れること？

それとも、新しい空間を生むこと？

けれど、捨てない、とは何だろう？

それは過去に縛られること？

それとも、繋がりを守ること？

道端に落ちた枯葉は、

土に還り、新しい命を育む。

だからと言って、すべてのものが

そのように自然に循環するわけではない。

捨てられない感情が胸に詰まる日もある。
捨てたはずの記憶が夢に忍び寄る夜もある。
選択はいつも難しい。

けれど、私は知っている。

捨てることも捨てないことも、

どちらも私の一部だ。

手放した重さも、抱え続けた温もりも、

すべてが、私を形づくる。

今日、またひとつ手にとる。

それをどうするか、まだ決められないけど、
その迷いこそが、生きている証だと思う。

なにもないまま

原田敬大

振り返るのはいつだって、

すべてが溶けたあとのことで、

感情だけがきれいなまま

私には何も残りません。

それは、

錆びついた遊園地のように

今日も誰もいないまま

いつまでも揺られているのでしょう。

一人だけの手紙を探しに

今日も散歩に出かけます。

春を待っている私は、

みずみずしく乾燥した息を吸って、

きつといい一日だったと

明日を振り返るのです。

そんな、触ることのできない

溶けた感情だけを

溢れるまで大切に積みかさねて

きっと水平線だけが残るでしょう。

歩いて歩いて歩いて海にいました。

そこは私じゃない

誰かしかいなくって、

だから私は、

誰も見たことのない

そんなありふれた

写真集を作ることになりました。

長年連れ添った友人の脳みそから

埃を被った私を取り出して、

○△□、色とりどりの模型で

空白を埋めていこう。

雪が降り始めた頃

すでに私は余白を失っていて、

生まれて初めて

新しい頁を買いに出かけられるのです。

産土

今野美伶

忙しない毎日に疲れ果て、
満員電車で嫌々乗り込む。
聞こえるはずもないのに、
懐かしいお囃子が耳をくすぐる。
一度も帰っていない故郷の、
遠い夜祭の音信か……。

日高見川の山奥の
さびれた社の大舞台
鬼の踊りに神は舞い
笛が鳴る鳴る可惜夜に

ひゆるりひゆるり
涼風と鳴る神の笛
稲穂を渡り船渡り
おじさま
御蚕様の羽を吹き過ぎる

おれさま
どろどろ轟く雷と
響く太鼓は地を鳴らし
舞い踊る笛は龍の声
さやけき産子の歌う声

ひゆるりひゆるり
天と地の声はとこしえに

千歳を渡り鳴り渡り
夜半の夏に風の吹く……

* 関東学院大学

Melancholy

真夏あむ

灰色のビルが立ち並ぶ池袋は空まで灰色で

アイドルの才能ない顔だったから、

何？

0歳の頃のことを憶えている。あの夕方のことを憶えている。
教育番組は精神世界と近しい。

愛を知らない人から恋をしていく、気持ち悪い。

自然の摂理を破壊して、私、雲を突き抜けたい。

女として幸せになった人から、ツイッターから消えていく。

きみは、少女をいつか、垢消しする。

モノの絵が綺麗だって、本気で言えるくらい、

綺麗に生きてみたら、きっと、今の幸せはなかった。

まだ壊れる気？

忘却

植松成美

サイドミラーに

可能性の断片が転がっている

何かをびたびたと巻き込むゴムの音は

枯れた落ち葉を 花を

巣から出た蟻を 狸を

昨日会った人を

記憶にないものを

あの人の影を

あり得る肢体をくくり付けて

引きずる

意思のある昆虫のように

前進する

道路は後退を許さない

泳がれる髪の毛

食べたいが過ぎて

会いたいが流れて

行きたいが消えた

飲めそうな星も

分厚いおとしたまも

透けた敷布団の柄も

ああ、アブナイ

通り過ぎた意識の断面がいくつも転がっているのが
サイドミラーには映らない

バックミラーは現実ではない

確かに進んでいる

不確かなレールに乗って

きみまみれの血を

きみだらけのアザを

ひきずりながら

気づいたら 120km/s

景色は変わらない

もう行くしかない でもどうしよう

森に入った途端

初めて君に追い抜かされて

窓にベタリ

曇っているわたしの肉体

目隠ししたきみを乗せてどこまで走ること何時間

進んだ分だけ重さを増していく星は

まだ地図にない惑星の

小さな国の集落を壊してもなお

再び関節は隆起し

四肢は芽生え

進み続ける

進んでいる

* 法政大学

わり算

高橋梨咲

$3 \div 2 = 1$ あまり1、

$42 \div 8 = 5$ あまり2、

$59 \div 6 = 9$ あまり5、

宇宙・空間∥時間あまり塵

咽頭炎・ウイルス∥怠惰あまり熱

日常生活・関係∥人間あまり消閑

あまり。割り切れないこと。あまるもの。非、同一的であるためのもの。

あまり1、2、3、4、5

ケバブ・冗談∥私の微笑あまり葛藤

今はもうしばらく行っていないけれど、

私がよく行くケバブ屋さんがあった。

私はそこによく行った。

私はケバブがとても好きというわけではないが、しかしながらケバブスタンドを見ると、私はそれをのぞき込み、そして、

勝手に繰り広げられる冗談の応酬に、私は絶対に失敗してはいけないと思うから、冷や汗を流す。

私は、別にこのおじさんに何か義理があるわけでも、借りがあるわけでもない。

のに、精神がすり減る。

私はおじさんにとって、取るに足らない女なのだということを自覚させられ、涙をこぼさんばかりに歩き、ほんのりと温かいケバブをもって、どこかにいなくてはいならないという苦痛が私にはどうしても耐えられない。何千万人もいるおじさんの女の中の、さらに取るに足りないひとり。そして日は沈み、明日がやってくる。明日がやってくるにもかかわらずケバブスタンドは相変わらずそこに立ち続けていて、私がのぞけば別におじさんはまたその応酬をはじめだろうことは明白なのに、私はどうすることもできず、ちょっと筋肉をこわばらせながら、そして精神もそれに連動させながら、そしてそのせいで精神科にも通いながら、表面だけでは礼儀正しい女を演じつつ、しかしながら私はどうしようもないおじさんに対する鬱屈を抱えており、私の女としての自信や女としての誇りなど、女として存在している以上はそこまで深く考えなくても別にいい問題を、私はくよくよと悩み続け、私の中から律儀に流れ出るところとしたチリソースとの和解を試みながら、私は明日を生きなくてはならないなんて何て不幸なんだ！ と考えきることでもできず、私は明日を生きていくわけだが、しかし私はあのケバブスタンドを見る度このことを思い出してしまうだろうとは思う。

ケバブ・女Ⅱ愉快あまりチリソース

散る墓標

新田裕麻

くれなゐの花

箸でつまみ 白い箱におさめるとき

時に

折れ曲がり 砕け 焦げた匂いを発する

(ぶおー)

夕暮れ時はずいぶん遠くでホエールが鳴いているね
くじらの亡骸

腐った体からおぼろの肉がほろほろ散り

骨でかこった箱庭に住まういきものを乗せながら
冷たい海を 遊覧している

(ぶおー)

と腹が鳴るのを

笑うことも耳にすることもない

女

安楽椅子に腰かけ とがった鼻先が透明になっている

風にさらわれた花弁

波間をぬけ

浜へ打ちあがる

燃えそこねたのだろうか

首筋をせずに避けていった

流線の視線の先で

女はわたしの足首をつかまえ

あたしもこんなに細かったらと笑った

ぶあつい指　ぬくい指

肉付きの良い下あごやふくらはぎ

正しい答えをしらず

わたしは

惑星大の鉄壁をのんだ

あたたかい襖の中から

めでたく二本足の出で立ち

はじめて月の表面を手にして

ここに0になる

炎が消える

少しざらつき、生白い君の砂丘に旗を立てた

八十余年の時間は降り積もる

箱のふたを閉める音



(笑)

岩野彩音

ほくろを取ったという

腕に有ったかどうか分からないようなほくろ

いいなあ、と声がそろそろ

きらめき、のようなもの

靴

服

アクセサリー

化粧品

その他よくわからないものを

長ったらしい横文字のブランドで

買ったという

私はそこにいない

いるのに

いない

資本主義だ、と思う

資本主義に踊らされているのだ

彼女たちは

そういうことに、する

横目で見ると

きらめき、だと思ふ

資本主義にかこつける

資本主義に括弧をつける

資本主義（笑）と格好つける

冷笑、冷ややかに笑うこと

嘲笑、嘲り笑う笑うこと

全然お金使わないよね、と言われたときの気まずさ

年に1、2回行くかどうかの映画を

毎月行っているかのように言う

精一杯の贅沢を

贅沢でないかのように言うむなしさ

彼女の瞳には嘲りが、見える

気がする

貧困、あるいはむなしさ

貧困ではない、と僅かなプライドが言う

十分な生活をしている、と思う

ならば残るのはむなしさ

クリスマス会で当たった4980円のリップは
毎月のバス代と中古のビジネスバッグになった

この前のリップつけないの？ と言われたとき
どうやってごまかそうかと思う

その時の

涙が出そうなほどの心臓の痛み

きらめき、みじめさの対極のこと